
手のひらの竜

ひららん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手のひらの竜

【Nコード】

N4460X

【作者名】

ひららん

【あらすじ】

就活中の雪音はふとしたことから知り合った手のひらサイズの竜に異世界に誘われる。ちょっとした好奇心で異世界に渡った雪音だったが、何故か突然現れた王子様をお願い事をされて……。異世界恋愛モノの予定です。それほど激しい描写にはならない予定ですが、保険としてR15をつけました。

都会・1

「竜を待っているの」

——私の一言が、すべての始まりだった。——

その日は就職試験だった。もう何度目になるのかは数えたくもない。相変わらず手応えのない面接を終え、私は空調の利いたオフィスビルから午後の街に吐き出された。たちまち湿った空気が身体を取り囲む。その湿度に、来月には梅雨が来ることを思い出して憂鬱になった。このまま梅雨になっても、ひよつとしたら夏になっても、多分、いや、きっと就活は終わらないだろう、そんな嬉しくもない予想が脳裏を過る。

周囲には一様に黒いスーツに身を包んだ同年代の人が数名。いつものように特に会話もなかった駅に向かって歩き、いつの間にか雑踏に紛れて互いを見失う。いずれまたどこかの面接会場で出会うこともあるのかもしれないが、いちいち覚えておく気にはならない。少子化だと言われても、今年大学を卒業する人間がいかに大勢いるかを実感する毎日だ。

曇り空の下、のショールウィンドウに映る姿は、白いブラウスに黒いパンツスーツ、黒い靴と黒いバッグに真つ黒な髪。何度見てもどこか見慣れない自分。私は軽く眉をしかめて黒ぶちの眼鏡を外してバッグにしまった。度は入っていないので、外しても視界に変化はない。

気分を切り替えようと私は駅の反対側の出口に回った。この辺りは駅を境にオフィス街と住宅街に別れている。オフィス街側に行つたのは今日が初めてだったが、住宅街側には何度も来たことがあった。

通りに面したチェーンのカフェに足を踏み入れたものの、残念なが

ら屋内の席がいつぱいだったので、カップを持って通りに面した屋外の席に出た。雨が止んだばかりらしく湿っぽい風が吹いている所為か、外の席は人影がまばらだ。軒から張り出したルーフの下の蔭濡れていない椅子に座ると、自然と通りに顔を向けることになる。

たちまち水滴を纏わりつかせたカップから冷たいカフェラテを一口飲んで、喉が渴いていたことに改めて気付いた。面接にはとつくに慣れたつもりだったけれど、それでも緊張していたらしい。

息を吐いて見上げた空では、黒い雲が風に流されていく。上空は風が強いのだろう。刻々と形を変えていく雲は、空を駆けていく竜のようにも見える。

——あの背中に乗って飛んだら気持ちいいだろうな。

そんな思いが過る。

——いいなあ、自由で。

続いて浮かんだ考えに私は首を振った。私だって自由だ。何の束縛もない。一人暮らしで、養わなければいけない人はいないし、将来を約束した相手も居ない。田舎の母は兄と同居しているから、私が帰る必要はない。単に私は私の為に、来年からの仕事を見つけないければならない。ただそれだけのことが、これほど大変だとは。私は溜息を飲み込んでストローに口をつけた。

このまま天気が回復すれば、後から家の近くの河原にジョギングに行けそうだ。少し身体を動かしたらすっきりするだろうか。

「あ、雪音^{ゆきね}ちゃん？」

下を向いていた視線の先に止まったのは新品の白いスニーカーだった。その上は細身な七分丈のジーンズに、シャープなラインのシヤツ。柔らかく巻いた茶色い髪が風に揺れる。

「佳織^{かおり}？」

よく知っている友人の名前の語尾を思わず上げてしまったのは、佳織の意外な服装に驚いたから。私の知っている佳織はいつも可愛

らしい雰囲気の服を着ていたし、何よりも艶々した黒い真直ぐな髪をしていたから。黒目がちな目をした佳織にあの髪はとても似合っていて、まるで日本人形のようなのだと思っていたのに。

「雪音ちゃん、元気？」

可愛らしく小首を傾げて佳織が訊く。こういう仕草は以前のままだ。

「うん、まあ元気。就活中だから凹んでるけど」

「そっか、大変そうだね」

「うん。今日は駅のおつち側で面接だった」

「お疲れ様」

ここで結果だの手応えだのを聞かないのは佳織の思い遣りだろう。

「髪、染めたんだね」

佳織は特に急いでいる様子もないから、目に着いたことを口にする。

「うん。雪音ちゃんと反対だね」

そう、私の髪は就活のために黒く染めた。それは今日の前にいる佳織が早々と内定をもらえたことと無関係ではないのだが、いまだに私はこの色に慣れない。

「私は就活だから仕方ないけど。佳織はせっかく綺麗な黒だったのに、勿体ないよ」

「似合わない？」

「そんなことないけどさ」

困った顔をして黙っている佳織に、私は仕方なく尋ねた。本来私に気にすることではないのだけれど。

「明良あきらとはうまくいつてる？」

「うん。これからレポートの打ち合わせで明良の家に行くところ」

佳織はこくりと頷いた。

明良は私と佳織の同じ大学のゼミ仲間で、この先の住宅街に住んでいる。私がこの駅に何度も来たことがあるのは、私が明良と付き合っていたからだ。その明良と佳織は現在つきあっている。つまり

佳織は私のモトカレのイマカノだ。

といつても、私が明良と知り合う前から佳織は私の数少ない友人の一人だったし、明良と私が別れたのはほとんど私の我儘だったから、その後で佳織が明良とつきあうことには何の問題もない。ないはずなのに、佳織は私に気を使って、こうして明良の名前を言う時に少し困った顔をする。気にしなくていいのに。

「そっか。頑張つてね。私はレポート書いてる暇ないから、ゼミの単位は落とすかも」

私があつさりと言つても、佳織は何か言いたげな顔のまま黙っている。その控えめな意思表示の様子が可愛いのは確かだが、その可愛さはむしろ明良に見せるべきだと思う。

「明良に聞かれたら、私は元気でそれなりにやってるからって伝えてくれる？ 多分もう私のことなんか興味ないとは思っけど」

「そんなこと……」

小さな声で抗議するように佳織が呟く。まったく明良も何をやってるんだか。

「ね、待ち合わせじゃないの？」

「う、うん」

「もう行つたほうがいいんじゃない？」

「うん……」

しばらくためらっていた佳織は意を決したように顔を上げた。

「雪音ちゃんは待ち合わせ？」

「う……ん、まあね」

否定しなかったのは、私から明良を取ったと佳織が思い込んでいたから。確かに私は佳織が明良のことが好きなことに気づいていたけれど、別れたのはそれが原因ではない。むしろ佳織はいい子だし、明良はいい奴だから、二人がつきあってくれればいいと思っていた。だから現状は歓迎しているのに、佳織だけが納得していない。

「彼氏？」

曖昧に答えた私に佳織は食い下がる。元々待ち合わせなんかして

いないし、明良と別れて以来彼氏と呼べそうな存在はいない。

「まあ、そんなとこ。まだ知り合ったばかりだから、彼氏とは言い切れないけど」

嘘を吐くのは好きじゃないけど、これは必要な嘘だ。

「何て名前の人？」

「いいじゃない、まだちゃんと彼氏じゃないんだし」

正直名前なんて考えていない。

「でも」

疑っている顔つきの佳織から視線を逸らして空を見上げる。さっきの竜の形の雲はだいぶん遠くに進んでいたが、まだ形は崩れていない。

「リュウ、そう、私は竜を待っているの」

出まかせに思いついた言葉を名前風に発音した私の言葉は、不思議な音色で遠くまで響いた気がした。

「リュウさんかぁ。どんな人？」

次の質問に内心で悲鳴を上げる。そんなこと、急に思いつくわけがない。

「えっと、その……」

「私、一緒に待ってていいかな」

「えっと、まだ時間掛かるから。面接が予想より早く終わっちゃって……」

私はしどろもどろに答えた。当たり前だがこのままいくら待っても誰も来るわけがない。

「そっかぁ」

「それより、明良、待ってるんじゃない？ あいつ結構時間には煩いよ」

おたおたしている私を見て、佳織がくすりと笑った。

「照れてる雪音ちゃん、可愛い」

完全に誤解だ。私は照れてるんじゃないって焦ってるだけだし、そもそも何をしてても可愛いと言われるタイプではない。可愛いのは佳

織だ。

「今日はもう行くね。リュウさんに会わせてもらうの、今度にしく」

折角の誤解を解くわけにもいかずに余計に焦る私の前で佳織は笑顔で言った。

「う、うん。明良によろしく」

小さく手を振って佳織を見送る。華奢な後姿が雑踏にまぎれて見えなくなったところで、私は大きく息を吐いた。どっと疲れた気がする。

椅子の席に身体を預けて、すっかり水っぽくなったカフェラテを飲み干した時、すぐ近くで声がした。

「待たせたな。俺に何の用だ？」

都会・2

私は最初、その声が自分に向けられたものだとは思わなかった。だって誰かを待っていたわけじゃない。

でも、その声は少々苛立ったように繰り返された。

「おい、俺に用じゃないのかよ」

あくまでも他人事として声の主に向けた視線の先にいたのは、暗緑色のトカゲだった。カフェの丸いテーブルの上で、私のてのひら程の大きさの細身のトカゲが、後ろ脚だけで立ち上がってこちらを見上げている。

「あら、綺麗なトカゲ」

爬虫類が嫌いな女の子は多いが、私は田舎育ちだから平気だ。とって好きなわけでもないが、目の前のトカゲはとても綺麗で不快感は全くなかった。

「失礼な、どこがトカゲなんだ」

トカゲはぐいっと胸を反らせて言った。

「え、トカゲが喋った？」

まさかと思いつつぽろりと出てしまった言葉に、予想外の反応があった。

「だから、トカゲじゃねえっての」

トカゲが——トカゲじゃないと言われてもトカゲにしか見えない——ほんと飛びあがって叫んだ。とはいえ身体が小さいから大した声量ではない。

「トカゲじゃなければ何？」

トカゲと会話している事実がうまく飲み込めないまま、それでも会話の流れのままに尋ねると、トカゲは小さい胸を偉そうに反らせた。

「俺は竜だ」

「竜？」

「そう、竜だよ。見ればわかるだろう」

言葉とともに振られた身体の両脇のぴらぴらしたものは、確かに薄い翼に見える。身体の大きさからするとこれで飛べるとは思えないけど。

「竜って、こんなにちっちゃいのか」

現実感がないままに思ったことを呟くと、手のひらサイズの竜は怒ったようにぽんと跳び上がり、その場で見事な後ろ宙返りを見せた。いわゆるバク宙だ。長い尻尾が鮮やかな弧を描いて回った。

軽やかに着地を決めた竜は、それで気分が変わったらしい。正面から怒る代わりにやりと笑って見せた——らしい。何しろ見慣れていないから表情がよくわからないのだが。

とはいえ、その顔は確かにトカゲというには少々彫りが深く、髭らしきものも生えている。さらに、良く見れば頭にはささやかながら角らしき出っ張りがあり、その後ろにはタテガミなのか、毛のようなものも生えている。確かトカゲにはこういうものはなかったはずだ。つまりは、サイズを無視するなら竜と言われればそう思えなくもない、といったところだ。無視するには大きすぎる違いだけれど。にやりと笑ったらしい竜は、ぐいと頭を反らせて胸を張った。鱗に覆われた身体が綺麗にしなる。

「俺も女の子ってのはおやつにちょうどいいくらいの可愛らしいモノと思ってたぜ」
「なっ」

絶句した私にトカゲ改め竜は重ねて尋ねる。

「で、俺に何の用だ？」
「用？」

竜に用なんてない。実在するとは思っていなかったんだもの、用事なんてあるわけがない。

「だって俺のことを呼んだじゃないか」
「あっ」

言われてやっと思い出した。さっき竜を待ってるって言ったのは

私だ。

「やつと思い出したか。で、何の用だ？」

「ご、ごめんなさい。本当に来るなんて思ってたから……」

申し訳なくて小さくなった私に、竜は器用に肩をすくめて見せた。多分呆れたんだろうと思ったけれど、竜が何か言う前に、私の前で小さくひつと息を飲む音がした。

視線を上げると、今にも悲鳴を上げそうな顔で女の人が大きく飛び退くところだった。

意外すぎる竜の登場で忘れていたが、ここは通りに面したカフェだ。テーブルの上のトカゲ——もしくは竜——は、違和感がありすぎる。道行く人の中には、爬虫類が嫌いな人もきつというはずだ。さっきの女の人はそのままこちらを見ようともしせずに逃げるように小走りに去っていく。

「ちよ、ちよつと、場所を変えよう」

私は立ちあがって鞆を肩に掛け、空いているほうの手を竜に差しだした。こちらの意図が伝わったと見えて、竜は身軽に私の腕を駆け上がって肩に乗った。硬い感触が手に残ったけれど、特に重くはない。

私は駅とは反対方向にある小さな公園に向かった。あそこなら植え込みがあるから竜も目立たないはずだ。つくづく土地勘のある場所よかった。

「この世界は随分人工物が多いんだな」

耳元で竜の声がした。声だけ聞けば同年代の人と話しているのと同じく変わらない。口調から、多分この竜はオスだろうな、と思う。竜に性別があるのかどうかは知らないけれど。

「この辺は都会だから。私の生まれ育ったところはもっと自然に囲まれてるんだけどね」

水溜まりを避けて歩きながら答える。これが大きな竜だと畏まらなくてはいけない気がしそだが、この竜はとても気安い雰囲気だ。私は敬語も使わずに話すことにした。

「ふうん。いろいろあるってことか」

感心したように竜が呟いたところで、目的の公園に着いた。幸い人影はない。雨が止んだばかりだからだろう。

ベンチは濡れていたので隅の鉄棒に寄りかかると、竜はすぐ脇の植え込みの葉っぱの上にひらりと移動した。なるほど、確かに飛べるらしい。トカゲとは違うってことか。

私は竜に向き合うととりあえず謝罪した。

「ごめんなさい、別に用事があったわけじゃないんです」

小さくても伝説上の存在だ。怒らせたら大変なことになるんじゃないだろうか。

「ま、いいってことよ」

意外にも竜は気さくに言い、更には勿体ないような申し出までしてくれた。

「折角来たんだ、何か用事ないか？」

気持ちはあるがたいが、そう言われても用事なんか思いつかない。

「急に言われても……」

「別に思いつきでもいいぜ」

竜は久しぶりに会ったクラスメイトのような口調で言う。

「願いを叶える代わりに魂を、とか言わないよね？」

念のため訊いてみると、竜は苦笑しながら首を振った。

「魂って貰えるものなのか？」

「さ、さあ……」

「とにかく礼はいらないぜ。気軽に何でも言ってみな」

促されて、たった一つ思いついたことを口にする。多分無理だろうけど、他に思いつかないし。

「うーん……。さっき竜の背中に乗って飛んでみたいって思ったんだけど……」

「悪かったな、小さくて」

案の定気安く言ってしまった私の言葉は竜のプライドを傷つけたらしいが、この大きさの違いはどうにもならない。ぽんと跳び上が

りくると宙返りをした竜は、今度はぽつと火まで噴いた。トカゲ型のライターみたいだ。さすが竜。

どうやらこの宙返りは竜の気分の切り替えになっているらしい。

「ねえ、竜さんはどこから来たの？」

思いついて尋ねてみる。

「あっちの世界だ」

「あっち？」

「ま、方向はないようなもんだが。あっち側って感じかな」

説明にはなっていないが、要するに別の世界ってことだろう。竜自体がファンタジー系の存在だから不思議ではない、というか、竜と会話している時点で十分不思議なんだから、むしろ意外感はい。少ない。

「あっち側ってどんなところ？」

竜の世界なら中国の仙人がいそうなところだろうか。それとも西洋の中世？　そういえば中国の竜と西洋のドラゴンは違うはずだけど、目の前の竜はどっちなんだろう？　ええと、翼があるから西洋系？　でも顔は中国系？　私には二つの違いはよくわからないし、そもそも架空の存在に判別基準があるかどうかも怪しい。

考えて込んでいる私に、竜は予想外の提案をした。

「行ってみるか？」

「え？」

「気になるなら連れてってやるぜ。入口の前には海しかなかったけどな」

「入口？　海？」

「ああ。小島の海に面した所に入口があったんだ。たまたまその前を通りかかったら、あんたの声が聞こえたから、見に来てみた。大した手間じゃないから心配しなくていい」

要するに私にこちら側を見せてくれようというらしい。この竜、意味なく呼び出したというのに、怒らないばかりか随分親切だ。

「えっと、帰れなくなったりしないよね？」

一応警戒して訊いてみる。

「短い時間で、入口から離れなければ大丈夫だろう。その代わり海しか見られないけどな」

「海、か」

言われた途端に海が見たくなった。この都会では海が見えない。

故郷では家から少し行けばもう遠くに海が見えていたのに。

「あつちは天気はいいの？」

「ああ。からつと晴れてたぜ」

それはなかなか羨ましいと思った。この湿っぽい天気は不快だ。

「じゃあ、ちよつとだけ、ね。竜さん、お願いします」

簡単に決意をして頭を下げる。

「その竜さんつての、なんとかしないか？」

返事の代わりに竜が提案した。

「あ、そうか。竜さん、名前はあなの？」

「ハー又って呼んでくれ」

「ハー又？」

「ああ、ハー又だ」

呼び易い短い名前でもよかった。

「私は後藤雪音」

さらにと名乗った音は、ハー又には発音しにくかったらしく、ころうじて語尾だけが繰り返された。

「……キネ？」

「うん、それでいいや。キーネって呼んで」

私は自分の名前があまり好きではない。「後」とか「雪」とかってイメージが暗いし、名字に濁音が入っているのもイマイチな感じだ。しかも「雪音」つてのは楚々として大人しげで綺麗な上に抽象的すぎて、私に似合わない気がする。だからハー又の発した硬質な音に心が惹かれた。

「じゃあ行くぞ、キーネ」

言いながらハー又が飛び上がり、私の肩にそつと足を掛ける。次

の瞬間、私の周囲は乳白色の光に包まれた。

海辺・1

光が消えると目の前には綺麗な青い色が広がっていた。しばらくぼんやりとその色を眺めてから、やっとそれがよく晴れた空と風いだ海であることを認識した。

ざーん、ざーんと穏やかな波の音が優しく鼓膜を揺らし、潮の香りが鼻腔をくすぐる。確かにこれは海だ。

もう見回すと、私は海辺に面した岩場に立っているらしいことがわかった。私の足元から少し先には観光地のポスターにありそうな白い砂浜を挟んで海が広がっている。左右を見回しても人工物は一切見えない。当然ゴミなど落ちていない、感動的に美しい海辺の光景。しばらく見惚れた後、やっと私は同行者の存在を思い出した。こんなに素晴らしい風景を見せてくれたんだもの、いっぱいお礼を言わねば。

「ハーヌ、すつごく綺麗だね」

言いながら肩を見降ろしたが、期待した姿はそこにはなかった。

「あれ？ ハーヌ？」

足元の地面を見まわしたが、トカゲの姿は見つからない。茶色い岩場に深緑のトカゲはそれほど溶け込むとは思えないけれど、隙間に入ってしまったのだろうか。でもハーヌがわざわざ隠れる必要はないはずなのに。

もつと遠くに行ってしまったのかと改めて見回すと、私の左後方が暗緑色の岩になっているのがわかった。この色だとハーヌと同じだから、見つけるのは困難だ。でも何でハーヌは隠れているんだろう。タチの悪い冗談だろうか。

少々腹を立てながら岩に目を凝らした私の前で、突然その岩が動いた。

「えっ」

思わず瞬きしたけれど、確かに見間違いいではない。岩は動いてい

る。これだけの大岩が崩れたら私なんかぺちゃんこだ。

恐怖から数歩後ずさり、離れた所から改めて見上げて、やっと私はその岩が竜の形をしていることに気付いた。——私の前にあるのが前足、その後ろに翼、上には首がそびえていて——私の見えている前で首がきよるきよると振られた。動きにつれて繊細な縞を描いている鱗が微かに光を反射する。

この形、この色、大きさはとんでもなく違うけれど、これはきつとハーヌだ。この大きさなら間違いなく竜に見える。

「ハーヌー!!」

必死に上を向いて呼びかけたが、ハーヌは気がつかない。手を大きく振りながら息が切れるほど何度も呼んだのに、ハーヌは上のほうを向いて周囲を見回すばかりだ。

——ちよつとは下を向いてくれればいいのに。

八つ当たり気味に思つて、気がついた。ハーヌは自分よりもずつと大きい「キーネ」を探しているんだ。だから上ばかり見ていて、当然下なんか向くわけがない。

と、同時にあることに思い当つてぞつとした。このままハーヌが「キーネ」を探しに飛び立ってしまったら、帰る方法も判らないまま私はここに置き去りだ。大きな「キーネ」を探しているハーヌが私を見つけることは絶対にない。何とか今ここでこちらを向かせなくては。

焦りながら見回すとハーヌのすぐ向こうに本物の岩がそびえているのが見えた。あそこから背中に飛び移れば、いくらハーヌでも気がつくんじゃないだろうか。うまい具合にハーヌ背中 of 少し上に、こちらに向かつて張り出した大岩がある。あそこまではなんとか辿りつけそうだ。

私はまず肩に掛けたままだったバッグを一度降ろして、ベルトを外した。このバッグはベルトのフックを掛け替えるとリュック型になるのだ。岩を登るのなら両手が使えたほうがいい。しっかりファスナーを閉めて、背中に背負いなおした。

上着はちょっと迷ったけれどそのまま着ていることにした。万一滑り落ちることがあれば、服は厚いほうがガードになる。幸いパンツスーツにローヒールだから、動きは比較的楽だ。もっと大人しい印象の服のほうが就活向きかもと迷ったが、服に似合った動きができる自信がなかったので活動的なものをチョイスしたのが功を奏したことになる。——まったく予想はしていなかったけれど。

登り始めてみると、茶色い岩はごつごつとして手掛かりや足場が多く、ありがたいことに予想よりも登り易かった。あちこちに黒い鳥の羽や羽毛が落ちているから、近くに巣があるのかもしれない。糞まで落ちているのは嬉しくないが、贅沢を言っている余裕はない。最初はハーヌが飛び立ってしまわないかとちらちら後ろを窺いながら登っていたけれど、一度足を踏み外しそうになってからは気を引き締めて目の前の岩に集中することにした。ここで落ちることは最悪の結果に繋がっている。

目標にしていた岩に手を掛け、身体を引き上げる。これくらいで息が切れているのは運動不足の証拠だろう。いくら就活中とはいえ、ちよつと情けない。

上から見下ろすと、ハーヌの背中は一メートルくらい下になっていた。背中には広いけれど、うまく真ん中に乗らないと鱗で滑って下まで落ちてしまいそうだ。慎重に狙いを定めて——と思った途端、ハーヌが足踏みをした。顔が真直ぐに上げられる。まさか飛び立つ気じゃ——。

焦った私は大声を上げながら深緑の背中目掛けて飛び降りた。

「ハーヌ——!!」

私の無謀な試みは、確かにハーヌをこちらに向かせることに成功した。長い首の上の頭がくるとこちらを向き、怪訝そうな声が降ってくる。

「キーネ？」

続いて鼓膜が破れるような大音声が轟いた。

「キーネ!!!!」

次の瞬間、私の足元が大きく跳ね上がり、私の身体は空中に投げ出された。耳元で風が鳴る。本当に怖いと悲鳴は出ないものらしい。弧を描いて青空を切り裂くハーヌの尻尾がスローモーションで目に映る。

——びつくりしたハーヌは、きっとバク宙をしたに違いない。それがハーヌの癖のようだった。今更思い出しても遅い。そろそろ岩に叩きつけられる頃だろうか。きっと大怪我だろう。骨折くらいで済めばいいが、と思った時、急に身体が止まった。加わる重力に口から内臓が飛び出しそうだった。

「ぐ、ぐえっ。げぼっ」

品のない音が口から出たが、幸い音だけで済んだようだ。

私の胸を掴んでいたハーヌの鉤爪がゆっくりと動き、慎重に私の足を地面に置いてくれると、そのまま私は岩にすがって激しく咳き込んだ。

「大丈夫か、キーネ」

「あう、た、多分……」

なんとか答えて大きく深呼吸をし、身体を真直ぐにする。少しずつくらするのを目を瞑ってやり過ごす。ややあつて目を開けると、ハーヌの大きな顔が心配そうにこちらを見ていた。

「ごめんな」

しゅんとした表情で紡がれた謝罪の言葉に、首を横に振って見せる。確かに私を跳ね飛ばしたのはハーヌだけれど、助けてくれたのもハーヌだし、原因は私にある。

「ううん、私も悪かったから。助けてくれてありがとう」

「本当に大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

眩暈も治まったし、今度は自信を持って答えられた。

「それにしても、ハーヌってこんなに大きかったんだね」

改めて見上げるとハーヌも頷いた。

「界を渡ると大きさが変わることがあるとは聞いていたが、こういうことだったとは知らなかったぜ」

今のハーヌは身体だけで大型のトラックくらいある。頭だけでも私と同じくらいの高さだ。うん、よく絵で見る竜そのものといった感じ。

しみじみ見上げていると、ハーヌが思い出したように言った。

「そう言えば、さっき何か光るものがあっちのほうに飛んで行ったが、心当たりはないか？」

「光るもの？」

「ああ」

光ると言われても、ペンダントはちゃんとあるし、他にアクセサリーは着けていない。リュックのファスナーも閉まったままだ。ポケットは——と手を当てたところでぎくりとした。スーツのポケットがぺたんこだ。携帯を入れてあったはずなのに。

慌てて手を突っ込むが、中は空だった。反対のポケット、ズボンのポケット、胸のポケットからリュックの中まで確認したけれど、やはり携帯は見つからなかった。

「大事なもののなか？」

「うん。あれがないとかなり困る。探さなきゃ」

携帯がないと、まず就活に困る。その他の連絡先も全部携帯の中だ。もし壊れていてもメモリーさえ吸えればなんとかなるはず……。「多分あっちだったと思う」

ハーヌが指したのは岩場の先だった。私の携帯はかなり目立つから、きつとすぐ見つかるはずだ。壊れていないといいけど。

「あ」

岩場に向かって踏み出した私の視線の先には、王子様が立っていた。

海辺・2

もちろん「王子」なんて名札が下がっているわけではないけれど、目の前に立っていた人は絵に描いた王子様そのものだった。

軽くカールする明るい金髪に青い目、白い肌。鼻筋の通った美しい顔は西洋人っぽい細面ながら頬の柔らかい曲線が優しい雰囲気で、育ちの良さを感じさせる。肩にはね上げた短めのマントの下から覗く体軀は、決して太っているわけではないが骨格そのものが大きい上に適度に筋肉が乗っている結果、典型的な日本人よりもかなり大柄な印象だ。ゆったりしたズボンと革のブーツに覆われた長い脚。腰には宝石で飾られた剣が下げられている。非の打ちどころのない姿に唯一そぐわないのが――

「あーっ、私の携帯!!」

そう、王子様の手には、安っぽく煌めくデコシールの貼られた私の携帯電話が握られていた。

言い訳をするならば、携帯にデコシールを貼るのは決して私の趣味ではない。

着る物、持ち物やインテリアに至るまで、よく言えば実用的、悪く言うなら可愛げがないと表現されるタイプのデザインが私の好みだ。別に可愛いものが嫌いなわけではないが、平均よりも高めの背とがつちりした肩幅といった遺伝子的な部分から、私には可愛いものが似合わないのだ。だから可愛いものが近くにあると、その似合わないさが気恥ずかしくて、落ち着かなくなる。

当然きらきらしいピンクとシルバーの痛い雰囲気携帯電話は私の趣味ではない。何の面白味もない黒の携帯電話にデコシールを貼ったのは私の姪っ子だった。

私と兄は一回り以上年齢が離れている。はっきり言われたこともないし、わざわざ問い質すような事柄でもないが、父と母の年齢からすれば兄が普通で、私は想定外にできてしまったところだろう。

その兄は、昨年父の三回忌を昨年済ませると、一人暮らしの母が住んでいた家を建て替えて同居を始めた。父を亡くして心細いことを隠そうとしなかった母は家族と暮らせるのを喜んだ。

私にしても、産んでくれたことに感謝を惜しむつもりはないが、やっと兄が手を離れたところにもう一度育児をしなければならなかった母は、結果的に私をほとんど自分の母親に預けきりにしたので、正直に言えば今更母と二人暮らしをするのは気づまりだったから、兄の決断は大歓迎だった。

それでも帰る家がなくなるわけではないと言って、兄は新居にも私の部屋を作ってくれた。きっと数年のうちに姪っ子を使うことになるのはわかつているけれど、それでも気遣いはありがたい。逆にいえば、そんな気遣いをしなくてはならない程私と兄の関係は他人行儀だ。年齢が離れすぎてほとんど親しく接する機会がないまま今まで来てしまった。

昨年の暮れに初めて訪れた兄の家は、まだ新築の匂いがしていた。それでもその家は既に義姉の切り盛りする空間となっていて、勝手のわからない私はただ客として自分に与えられた部屋でぼんやりと時間を潰すことしかできずにいた。

そこにひよっこ顔を覗かせたのが姪っ子だった。多分新居で初めて迎える年越しの準備に忙しい両親から私に遊んでもらえと言われたのだろう。

やってきたのはいいが、姪っ子は入り口に立ったまま困った顔を

してもじもじしていた。子供に慣れていない私は小学生にもなっていない姪っ子にどう話しかけていいかわからなかったし、あちらもあちらで、数えるほどしか顔を合わせたことのない叔母に何を言ったからいいのか思いつかなかったのだろう。

それでも、先に口を開いたのは姪っ子だった。

ベッドに座って意味もなく携帯電話を弄っていた私の手元を見て、彼女は言ったのだ。

「それ、綺麗ね」

彼女の視線の先で揺れていたのは、銀色の熊のストラップだった。

「これ？ この熊？」

「うん、そう。可愛いし、綺麗」

私の隣に座った姪っ子は、そっと手を伸ばしてストラップに触れた。

「じゃあ、あげようか？」

このストラップは何かの景品で、大きさが手頃だったから使っていただけだった。可愛いと言えば可愛いが、私にはむしろ安っぽいメツキがすぐ剥げるだろうという予測が先に目に着くシロモノだ。

たまたまそれまで気に入って使っていたストラップのコードが擦り切れてしまったので、気に入ったのが見つかるまでの繋ぎのつもりで使っていたから、私には特に思い入れがなかった。

「え、いいの？」

「うん。あげる。携帯は持っていないなくても、鞆につけてもいいんじゃないかな？」

「わあ、ありがとう」

気軽に言った私とは裏腹に、姪っ子は外したストラップに頬擦りをして喜んだ上、それだけでは悪いと自分の宝物の入った箱を持ち出してきた。

「どれでもいいから、つけてあげる」

金色のリボンやピンクのチェーンといったきらきらしたもので溢れた宝箱の中から、大切そうにデコシールの袋を取りだした姪っ子

は、一生懸命な様子で言った。きつとそういった華やかな小物に心惹かれる年頃なのだろう。

正直私はそんな子供騙しに魅力は感じなかったが、彼女の真面目な様子を前にして無碍に断るほど冷たい大人ではない。

「ありがとう」

「どれがいい？」

そう訊かれて困った私は、すべてを彼女に任せることにした。

「どうしたらいいかわからないから、好きに飾ってくれる？」

結果として出来上がったのが、無駄にきらきらしい今の携帯だ。頼んだ時は、帰ったらすぐに剥がせばいいと思っていたのだが、あまりにも熱心に貼ってくれた様子から、痛いと思いつつもそのままにしていた。

幼児の仕事にしては随分ときつちりと貼ってあったし、何よりも使ってみたら黒い鞆の中で派手派手しい携帯は探しやすいという思わぬ利点を見つけたという事情もある。

その携帯が、今は異世界の王子様の手に握られている。これほど違和感のある光景も珍しい、と私はどこか感心して見ていた。

「こちらはマレビットさまのご宝物でございましょうか？」

王子様の口から出た言葉は日本語だったけれど、聞き慣れない単語ばかりだった上に、見るからに横文字を喋りそうな王子様から発せられたので、私は意味を取り損ねてしまった。

「マレビットさま？」

かろうじて耳に残った単語を繰り返す。音としては日本語なんだけれど、意味がわからない。

「マレビットさまでいらっしゃいますよね？」

確認するように王子様が問う。だからマレビットって何？

「ごめん、私、マレビットが何だかわからない。でもその携帯は私のだから。拾ってくれてありがとう」

とりあえずわからない部分はスルーして、手を伸ばした。

「やはりそうでございますか」

素直に渡してくれたものの、王子様は残念そうだ。手を離れた後も未練がましく携帯を見つめている。

視線を感じながらも私はとりあえず携帯を動かした。よかった、とりあえず動く。勿論通信はできないけれど、メモリーは無事らしい。

ほっとしてハーヌを振り返る。

「壊れてなかった」

「よかったな」

ハーヌが頷いた。——私だったら携帯電話より竜のほうがずっと気になるはずだけど、この世界だと竜は珍しくないのかな。

疑問はそのままにもう一度王子様にお礼を言う。

「ありがとう。ちょうど探していたところだったの」

「それはようございました。お役に立てて光栄でございます」

王子様の物言いはやたら堅苦しい。ちょっと困って軽い感じで自己紹介してみた。

「私は後藤雪音、キーネって呼んでね」

「私はアンティデュール国の王太子、ユーノリディアス——」

名乗られた名前は長すぎて聞き取れなかった。それにしても、本物の王子様だったんだ。びっくり。なんでこんな誰もいないところに王子様が一人でいるんだろう？ 普通は護衛とかお付きの人とか、いろいろ居るんじゃないんだろうか。

「——ユーノとお呼びください」

ぼんやりと考えている横で名乗りを続けていた王子様は、簡単な呼び名で締めくくった。助かった、これなら覚えられる。

ほっとした私は、次のユーノの言葉にぼかんと口を開けた。

「キーネさま、どうか私にマレビトのお力をお貸しください」

——「どうやらマレビトが私を指しているのは間違いないようだ。

でも、本物の王子様に私に貸せる力があるとは思えないんだけど。」

海辺・3（前書き）

トリカラマ
鳥島と、似たような漢字が多くて紛らわしいかもしれません。ごめんなさい。

11 / 6

鳥を鴉に改めました。少しは読み易くなっているいいのですが。

「ええと、まずマレビトってのがわからないんだけど」

力を貸すとか貸さないとかって言われても、そもそも私に特殊能力はない。異世界に来たからって能力的な変化がないことは、先ほど岩を登るので苦労したことを考えればほぼ間違いないだろう。変な期待をされても困る。

「マレビトというのは、異界からいらした方のことです」

ユーノの言葉は簡潔だけれど、説明された気がしない。

「どうして私が異界から来たってわかるの？」

「異界からいらした方は黒い髪をなさっていると聞いています。キ―ネさまは見事な黒髪をお持ちですから」

「ふうん」

——あっちの世界にだって金色とか茶色とか、いろいろな色があるんだけどな。

反射的に浮かんだ考えはとりあえず言わずに、肝心の部分を探ねる。

「私は確かに異界から来たけれど、何か特別な力があるわけじゃないから、力になれるとは思えないけど？」

「マレビトさまは稀なる知識を持っているのでマレビトと呼ばれています。しかもキ―ネさまは竜を従えているような方ですから、きっと私の悩みなど即座に解決していただけると存じます」

なんかこの王子様、激しく誤解してないか？

「この竜は、——ハー又っていうんだけど——ハー又は私が従えているわけじゃないわ。どっちかっていうと、私がオマケの立場よ」

ハー又は私がいなくても困らないけれど、私はハー又がいないと帰れない。どう考えても私が従ってる側だ。——胸を張って言うことでもないけど。

「失礼いたしました」

私の不快感が伝わったのか困ったようにユーノが謝ったところで、黙って私たちの遣り取りを聞いていたハーヌが口を開いた。

「どっちが従うって関係じゃないんだが、とりあえずその頼みを言ってみたらどうだ？」

確かに、そのほうが建設的だ。

私の視線に促されて、ユーノは再び口を開いた。

「私がこの島に参りましたのは、わが国の宝を探すためでございます」

「宝？　こんな海岸に？」

「はい。普段は王宮の宝物殿に納められているのですが、先日、近々行われる私の成人の儀の準備で広間に出したところを、窓から侵入した渡り鴉フタリガラスに持ち去られてしまったのです」

——それは結構マヌケな話なんじゃないだろうか。それにしてもこれから成人式ってことは、きっとユーノは私よりも年下だろう。西洋人の年齢って見た目からだとかよくわからないと、改めて思う。まあ常に実年齢より上に見られる私に言われたくないだろうけど。

私の感慨を余所に、ユーノは語り続ける。

「何しろ一番の国宝ですから、儀式までには何としても探し出さねばなりません。見つからない場合は私の王位継承問題にも発展しかねないので、このことは公にはせず、私自身で隠密裏に見つけ出すようにというのが、王の命令でございます」

——あらま、王位継承とか、すごい大問題じゃないの。

「まずは鳥に詳しい者に聞いたところ、鴉が巣に持ち帰っているのではないかとの見解でした。そして、この島の隣にある小島が渡り鴉の営巣地になっているそうなので、それを探しに参りました」

そう言えばこの島にも随分黒い羽根が落ちていたっけ。隣の島に巣があるなら、ここにも立ち寄っているんだろう。

「隣の島なら直接行けばいいんじゃない？」

私の素朴な意見にユーノは溜息を吐いた。

「渡り鴉は非常に凶暴なので、直接近づくのは大変危険です。幸い鳥ですから夜中は寝静まっていますので、この島で夜更けまで待つて小舟で近づく予定でおりました」

「夜中に探し物なんてできるの？」

またしてもユーノの溜息。

「問題はそこなんです。探しているのは国宝なので、多少は光るらしいのですが、それでも見つかるかどうか……。それに増して、渡り鴉は非常に攻撃的で危険な鳥ですから、たとえ夜中でも巢に踏み込んで無事とは思えません。みすみす臣下を危険に晒すのは避けたいのですが、他に手段がなく……」

「そうだったんだ」

携帯は光源になるけれど、その程度で解決できるとは思えない。

「臣下たちは今あちらの浜で準備をしておりますが、私は一足先にその島の様子を遠目でも見ておこうと思い、海岸伝いに歩いているところでした。そこにハー又さまと一緒のキーネさまのお姿が見えたので、これは神が我が国に遣わされた救いだと思ったのですが……」

——頼むからそんなご大層なものにしないでくれ。

私の嘆きを感じたわけではないだろうが、ハー又は海のほうに視線を向けながら尋ねた。

「その小島つてのはどの辺りなんだ？」

「その先を回ったところからはもう見えるはずですよ。渡り鴉は警戒心が強いのであちらから見えると襲われる恐れがあるので、私共の船は反対側の入江に泊めてありますが、今は昼間ですし、こちらから少人数で見るくらいなら大丈夫らしいですよ」

言いながら方向を示して歩き始めたユーノの後について、波打ち際を歩く。靴越しでも濡れた砂の感触が心地よい。

「昼間のほうが安全なの？」

だったらわざわざ夜に行かなくても、と思って訊いてみる。

「あくまでも遠目で見るなら、だそうです。この近くの漁師の話では、渡り鴉たちは日中は島から離れて魚を取っていることが多いのですが、島に侵入したのが見つかりと戻ってくるらしいです」

先ほど私がよじ登った大岩から続く岬を回り込むと、確かに小さな島が見えた。海からいきなり垂直に切り立った崖の上が平らになっでいて、わずかに木が生えているのが見える。確かにあの上にいるときに鳥に襲われたら、崖から海に飛び込むしかない。海面から岩が覗いている様子を見れば、それがどんなに危険なことか尋ねなくてもよくわかった。

とはいえ、あの崖を暗い中で登るのも同じくらい危険だろう。さつき岩を登ったときだって、しっかり見えていても結構大変だった。確かに鴉はいないようだな」

ハーヌが言った。私には島の形しかわからない。

「見えるの？」

「ああ。近くの海上にもいないみたいだな」

瞳孔が縦の線になった目でハーヌは島の周辺を見ている。きっと私よりずっと遠くが見えるのだろう。

「俺は渡り鴉の営巣地は何度か見たことがあるが、いくら日中でも少なすぎる気がするぞ。他にもっと大きな巣があるんじゃないか？」

ハーヌの問いに、ユーノが答える。

「既に渡りの季節が始まっていて、群れの大部分は北に向けて既に飛び立った後だそうです。今残っているのは最後の一部分だとか」

——なるほど、渡り鴉と言うくらいだから、渡り鳥なのね。

「だったら全部渡ってからゆっくり行けばいいだろうに」

「仰ることはごもっともなのですが、成人の儀に間に合わせねばならないのです」

「なるほどな」

ユーノの説明に頷いたハーヌは、私のほうを向いた。

「キーネ、空を飛んでみたいって言ってたよな？」

「え？ うん。飛べたら気持ちよさそうだと思うもの」

「ちよつと上から見てみるか？」

ハー又は小島を顎で示す。

「よろしいのですか？」

ユーノが嬉しそうに尋ねる。

「キーネ次第だな」

答えたハー又はに、私は大きく頷いた。

「行く。私、飛んでみたい」

小島・1

ハーヌの背に乗って飛んだ感覚は、一言でいえば「最高！」だった。

天気は上々、公害のない空と海は青く光っている。風は吹き付けてくるけれど寒くはなくて、むしろ気持ちがいい。

ハーヌの首の付け根に座り、手でたてがみを掴む。飛び立つ前に確認のためぎゅっと引っ張ってみたけれど、私の力くらいでは痛くないそうだ。

「ハーヌ！　すごく気持ちがいいねっ」

風に飛ばされないように大きな声で言うと、長い首をくるりと曲げてこちらを向いたハーヌが笑った。顔自体が大きいのと竜なのとでわかりにくいけれど、楽しそうな表情をしている気がする。

「それはよかった。じゃあもう少し高く飛ぶぞ」

「うんっ」

答えた途端に、ぐっと高度があがる。ばかりと浮かんだ雲が横に見えた。

「うわっ」

小さな叫びと共に、背負ったリュックが肩に食い込んだ。ユーノがしがみついたらしい。

ハーヌの背中に乗るときにユーノとどちらが前になるかモメた拳句、結局私が前になった。私は別にユーノの後でも構わなかったのだが、ユーノは自分が前になってハーヌを乗りこなす自信はないと言いきった。別に乗りこなすというほどのことではないんだけど。

私は前でも構わないけれど、ただ直接身体に抱きつかれるのは嫌だった。ユーノが私のリュックに掴まることになった。いくらイケメンでも、いや、イケメンだからこそ、密着されるのは嫌だ。ユーノも直接私に掴まることにならなくてほっとしたらしい。さすが王子さまは品行方正だ。

結果的に私が前なのは正解だったと思う。とにかく視界が広い。

ハー又が上昇すると雲がぐんと近づいて、一瞬視野を白い霞みが覆い、そしてぱあっと青空が広がる。下降に転じるときらきら輝く海面が大きく広がる。次に見えるのは滑らかな回転に伴って傾く水平線。綺麗な弧を描いて視野を過るハー又の長い尾。後ろではこうはいかない。

「わ、わっ」

背中でユーノの声がした。相当怖がっているようだ。

無理もないと思う。服装から察するに、この世界にはまだ飛行機なんてないだろう。きつと空を飛ぶことができるなんて考えたこともなかったはずだ。それが急にこの状態では、怖くて当然だ。

頭では同情しつつ、私はハー又に速度を落としてと頼むことはしなかった。だってこの心地よさは格別だ。吹き付ける強い風がちっばけな悩みなど吹き飛ばしていく。どんなジェットコースターだって、この解放感には勝てない。

「大丈夫か？」

「うん。すつごく気持ちいい」

心の中でユーノに「ごめんと謝って、自分の気持ちだけを答える。ハー又はまた笑ったようだった。うん、ハー又なら万一私が落ちたとしても、きつと海面に叩きつけられる前に拾ってくれるだろう。

——そう思えるからこそ、無邪気に楽しんでいられるんだってことは、私にだってわかつている。ついさっき出会ったばかりなのにね。少々手荒い空の散歩をたっぷり楽しんだ後、ようやく私たちは目的の小島に向かった。

上から見下ろすと、本当に小さな島だった。崖の上の平たくなった部分はテニスコートくらいだろうか。横から見た島は茶色い岩だったのに上から見るとほとんどが白と黒と灰色だ。

「鴉はいないようだな」

ハーヌが言った。

「うん。周りにもいないよね」

「ああ」

「降りてみる？」

「お願いします」

ユーノが小さな声で答えた。

「鴉が来たら逃げるからな」

言ってハーヌが高度を下げる。

降り立った島は糞の臭いが漂っていた。上から白く見えていたのは糞と孵化した後の卵の殻だったらしい。黒が羽根と羽毛。灰色なのは藁が何かで、巢の形に丸くなっている。

糞はしっかりと固まっていて、歩くと靴の下で微かに碎ける感触がした。多分糞が固まっているからこの程度の臭いで済んでいるのだろう。べたべたしていたり、歩くとびに粉塵が舞い上がるようでは歩くこともできない。

ハーヌの背中から滑り降りると、ユーノは膝に手を当てて身体を支えた。

「大丈夫？」

「は、はい……」

「顔色悪いよ」

「ちよつと船酔いというか、竜酔いしたようです」

言って大きく息を吐いたユーノは、ようやく身体を起こした。

「ご心配をお掛けして申し訳ありません」

「ううん。無茶させてごめん」

青い顔を見ていると良心が疼いた。ハーヌの飛行が手荒かったのは私の所為だ。

「探すのは宝石だよね？ 私、その辺を見てくるから」

罪悪感から積極的に協力を申し出て、ユーノから離れて歩きだした。とはいえ、こんな糞だの卵の殻だのばかりの島にとっても宝石なんかあるとは思えな——あれ？

すぐその大きな巢の脇に、ピンポン玉くらいの真つ青なものが煌めいている。きつとサファイアか何かだろう。ガラス玉とは思えない大きさだけど、私のデコ携帯とは輝きの深さが違う。

「あつた！」

声を上げて駆け寄る。いくら宝石でも糞のついた物を素手で触るのは嫌だったから、タオルハンカチで包むように拾い上げてみると、青い石は銀の指輪の一部分だった。こんなに大きな石のついた指輪なんて邪魔としか思えないけれど、高価なのは確かだ。

指輪を見せようとユーノに向かって振り向こうとしたときに、今度は目の端にピンク色の四角い物が映った。糞がべつとりとついていて、半分しか見えないけれど、でも、どうみてもあれも宝石なんじゃないだろうか。

駆け寄って持ち上げると、ピンク色の宝石がいくつも嵌められた金色のブレスレットらしきものがぶら下がった。石はさっきの青いのよりも小さいけれど、石の数が多くて金色の部分にはかなり細かな細工がしてある。これも間違いなく高価なものだろう。

改めて見回すと、あちらこちらで羽毛の隙間や糞の下からちかりと光るものが顔を覗かせていた。何かの道具らしい金属片やコインがほとんどだけれど、よく見れば宝石らしいものもちらはら混ざっている。鴉は光るものが好きというのは、世界が違って同じらしい。

どれが国宝なのかはわからないまま、私は目についた物を拾うことにした。集めてからユーノに選んでもらえばいい。文字通りの宝探しは、臭いさえ我慢すればなかなか楽しかった。

タオルハンカチに小さな山ができたところでハーヌの声が掛かった。

「鴉が戻ってくる。乗れ」

「はい」

言いながら戻ろうとしたところで、私は少し離れた巢の陰に他のものよりもずっと巨大な赤い宝石を見つけた。どうして今まで気が

つかなかったのかと不思議になるほどの強い輝き。

駆け寄って間近で見ると、石の中で炎が燃えているように光が揺らめいている。こんな光り方をする宝石があるなんて、聞いたこともない。きつとこれが国宝に違いない。

「キーネさま」

ユーノの声を聞きながら、私は宝石を素手で掴んだ。手が汚れるのなんて気にしていられない。今これを持ち帰らないと、次の機会はない気がする。

ぐつと力を込めたのに、宝石はびくともしなかった。

「キーネ、早く！」

ハー又に急かされながら、渾身の力で押すと、やっと宝石がぐらりと揺れた。一度動いてしまえば後は早い。二度三度と揺らすと、握り拳大の宝石がぱかりと取れた。

炎のように光っているのに、手触りが冷たいのが奇妙に感じる。

「取れた！」

宝石を掴んで立ち上がり、振り向いた目に飛び込んできたのは、こちらに向かって飛んでくる黒い鳥の群れだった。

小島・2

鴉はざつと見たところ百羽くらいのように思えた。もちろん正確に数えている余裕などない。それでごく一部だと言ったからすごい。

次第に大きくなる黒い鳥たちに向かって、ハーヌが威嚇するように炎を吹いた。ライターどころではない、巨大火炎放射器だ。鴉の群れがさつと二つに分かれて、またすぐに一つに戻る。その間もぐんぐんと距離近づく距離。——あれ、ちょ、ちよつと待つて。鴉にしては随分大きいような……。

頭の片隅で考えつつ、必死に足を動かして翼伝いにハーヌに駆け上がる。走るのは得意なんだけど、慌てているのと両手で宝石を抱えているのとで足が纏れた。よろけそうになったところをユーノがぐつと引つ張ってくれる。

「あ、ありがとう」

「いえ」

短い会話をハーヌの叫びがさえぎる。

「早く掴まれ」

鴉の鳴き声と嘴をカタカタ鳴らす音に急かされるようにハーヌの首の付け根に腰を降ろしてたてがみに掴まる。すぐにユーノも座った気配がした。

「掴まったよ！」

周囲の音に負けないように大声で叫んだ途端、ヒュツと風を切る音がした。次の瞬間、目の前に迫る巨大な鴉。あちらの世界の鴉よりもずつと巨大だ。翼を広げた幅は、多分二・三メートルはあるだろう。私自身よりもずつと大きい。茫然とした目に映るのは尖った嘴と鋭い鉤爪。そして何より怖いのは、その黒い目だ。明らかに知性の宿る目に、はつきりとした怒りと攻撃の意志が表れている。

「クケエ」

耳障りな鳴き声と共に鉤爪が眼前に迫る。逃げないと、同時に、逃げられない、とも思う。硬直した私の身体が、突然ぐつと下に押しつけられ、鴉の姿が視界から消えた。

ハー又が飛び立ったのだ、と理解するまでにわずかに時間を要した私は、耳元で叱責されて思わず問い返した。

「伏せてください」

「え？」

「伏せて」

焦れたような再度の強い声。ぐいつと背中を押されるままにハー又の背に上体をつけた瞬間、身体のすぐ上を大きなものが通り過ぎて行った。ばさりと翼が空気を打つ音が響く。

「あ」

「そのまま伏せて、しっかりと掴まったまま両腕を身体の下に入れてください」

丁寧な口調ながらも、強く命令する声が耳元で聞こえた。

「少しきついですが、我慢してください」

指示どおりに身体を縮めると、再び耳元でユーノの声。続いて上から何か掛けられ更にリュックごと抱き締められる感触に驚いた。身動きができないながらも視線を巡らせると、ユーノが頭からマントを被って私を抱き込んだらしい。風にはためくマントを掴んだユーノの意外に大きな手が間近に見えた。

遮るものができた所為で、鴉の鳴き声がぐぐもって聞こえるようになった。それだけで恐怖が幾分和らぐ。

「こいつらしつこいから、速度を上げるぞ」

「はいっ」

ハー又とユーノの息の合った遣り取りの直後に、ぐんと加速が増した。周囲の喧騒がだんだん遠くなる。

しばらくは身体を竦めていたものの、静かになると外の様子が気になってくる。

そつと顔を上げると、マントとユーノの手の間から水平線が見え

た。先程の騒ぎが嘘のように凪いだ海。遠くに白い帆を張った船が綺麗な航跡を描いているのが絵画のようだ。やっぱりこの世界の船は帆船なんだと、妙に納得しながら私はその姿を見送った。

「もういいぞ」

ハーヌの声がして、吹き付けていた風が緩んだ。ユーノがマントを除けて身体を起こすと、自然にほつと溜息が零れた。

「一旦どこかに降りるか？」

「うん、お願い」

ハーヌの申し出に私はすぐに頷いた。どこかでちよつと落ち着きたい。

すぐにハーヌは高度を下げた。目の下にはまた別の小島。この海域には小島が点在しているらしい。

人影のない浜に降り立ち、とりあえず私は上着を脱いでさばさと振った。鴉の糞がついていそうで嫌だが、洗うわけにはいかないから、せめてはたくことにしたのだ。

「怪我はないか？」

「うん、私は大丈夫。ユーノが庇ってくれたし」

言ってユーノを振り返り、私は絶句した。ユーノのマントの真ん中辺りがざっくりと二つに裂けている。

「私も怪我はありません」

ユーノは敗れたマントを持ったまま穏やかに言う。

「ユーノ、それ……」

「鴉の爪が引つ掛かったようですね。マントが厚くて助かりました」
ユーノは落ち着いた様子でマントを払うと、そのままふわりと身に付けた。

「背中、見せて」

「本当に大丈夫ですよ」

「いいから、見せて」

「はい、どうぞ」

たった今羽織ったマントを脇に寄せてユーノがあちらを向く。幸い上着の背中部分は切れていたけれど、肌に至っては届いていないようだ。

「ほら、大丈夫でしょう？」

上品に微笑むユーノはさっきまで青い顔をしていたのが嘘のようだ。

「うん。そういえば、具合が悪かったんじゃない？」

「なんだか通り越したみたいですね。二度目で慣れたんでしょうか」
おっとりとして王子様スマイルを浮かべるユーノは、最初の印象とは違って意外に図太いらしい。莫迦丁寧な口調がなくなったのは、同じ困難を潜り抜けてきた親近感からだろうか。ついでに敬語もなくていいんだけど、そう簡単には変えられないかな。

念のため、大丈夫だろうと思いつつも、ハーヌにも確認する。

「ハーヌも怪我はない？」

「ああ。鴉の攻撃は俺には効かないからな」

頷いたハーヌは、続けて厳しい声を出した。

「それより、無理はするなと言ったはずだが」

「ご、ごめんなさい」

これはもう謝るしかない。鴉を甘く見ていた。そもそもあんな大きいとは思っていなかった。いや、あちらの鴉だって、私には太刀打ちできないんだけど。

「キーネさまは、何を拾っていらしたのですか？」

取り成すようにユーノが尋ねてくれた。言われて手に握りしめていた宝石の包みのことを思い出す。

「そう、これ。ユーノが探している宝なんじゃないかと思って」

タオルハンカチを広げて、宝石を見せる。もちろんイチオシはあの炎の石だ。

「これなんか、いかにも国宝って感じでしょ」

「こ、これは……」

ユーノが驚いたように目を見開く。脈ありと見た私は勢いづいて尋ねた。

「ね、これじゃない？」

「ファフニレーンの炎……」

ユーノが呟くように言った。

「？」

「これはきつとファフニレーンの炎と呼ばれる宝玉です。百年程前に盗難に遭い、犯人は捕まえたものの結局宝玉の行方はわからないままになっていたという、伝説の石です。私も話に聞いたことしかありませんが、中で炎が揺らめいて見える石など他に考えられませんか」

「百年前って、じゃあ……」

「ええ。残念ですが、私の探していた石とは違うものです」

「そんな……」

私は改めてタオルハンカチの上で輝いている炎の石を眺めた。夕暮れで影が長くなる中、石の中の炎はますます光を強めている気がする。これが目的の石じゃないなんて……。

諦めきれない私はユーノに一つの提案をした。

「目的の石じゃなくても、伝説の宝玉を見つけたんだから、代わりにこれで納得してもらってわけにいかないかな？」

「それは……」

ユーノが困ったように言い淀む。

「ね、駄目？」

「私が探している宝玉は、『王家の扉』と呼ばれ、国の繁栄の礎となるものなのです。たとえ伝説の宝玉でも、代わりにはなり得ません」

「そっかあ……」

残念だけど、はっきり言われたら仕方がない。意味のない無理なんかするんじゃないかった。

肩を落とした私の隣で、今度はハーヌが尋ねた。

「その『王家の扉』ってのはどんな石なんだ？」

「大きさはこれくらいです」

ユーノは両手の人差し指で直径十五センチくらいの丸を描いた。

「乳白色の石で、日頃は鈍く光っています。ですが、この石の価値はその見た目ではないのです」

「見た目ではない？」

寶石に見た目以外の価値ってあるんだろうか。

「この石は不思議な力を持っているそうです。それゆえに『王家の扉』と呼ばれているとか。私自身その力についてはまだ知らないのですが、石と共にその力を伝えられること自身が、世継ぎの証とされています」

なるほど、何か特殊な石らしいと納得した私の横で、ハーヌが意外なことを言い出した。

「その石ってのは、俺たちが通ってきた『入口』だ」

入江・1

海域に点在する島々は夕日を背負ってくつきりしたシルエットを見せていた。私にはどれも似たような島に見えて最初の島がどちらの方角にあるのかすら分らないが、ハー又は迷いなく飛んでいくところが、私にも特徴がはっきりと分かる鴉の島が見える辺りになって、ハー又は飛びながら首を捻った。

「おかしいな」

「どうかしたの？」

「ああ、ちよつとな……」

呟きが聞こえたが、ハー又ははっきりとは答えず、鴉の島を大きく迂回して最初の島に降り立った。幸い鴉が再び襲ってくる様子はない。

私とユーノが降りると、ハー又は重々しく私の名を呼んだ。

「キーネ」

「何？」

用事があるとすればユーノだろうと思っていた私は、意外の感を抱きつつ答えた。

「入口がなくなった」

簡潔な言葉の意味が、何故だかうまく飲み込めずに、私はただ疑問の声を上げた。

「え？」

「俺たちが通ってきた異界への入口が消えているんだ」

「それってユーノが探している宝玉と同じっていう……？」

今までどこか他人事だと思っていた所為で、自分に関係することだと思えないまま、私は尚も部外者のように尋ねた。

「そうだ。石の形になっているのは珍しいとは思ったが、まさか消えるとは思わなかった」

呻くようにハー又は言う。

——入口が消えたということは——。

じわじわと悪い予感が身体を這い上がる。ハーヌの深刻な様子が、それがただの予感ではないことを語っているのに、私はそれでも理解することを躊躇った。

「消えたってことは、まさか……」

言葉にしてしまうことを恐れる私に、ハーヌが引導を渡す。

「ああ。このままではキーネはあちらに帰れない」

「そ、んな……」

声にならないまま、思い浮かんだのは明日の予定、明後日の予定、来週の予定——。

「すまない」

呆然とする私にハーヌが頭を下げた。

「俺が帰れると言ったからキーネはこちらに来たのに、こんなことになっちまって。とにかく何とか方法を探すから自棄にだけはないでくれ」

「自棄に……」

動かない頭に、やっと事の重大さが沁み込んできた。明日の予定どころではない。このままずっと——。

「もう帰れないってこと？」

大声で尋ねたつもりだったのに、私の口から出た声は弱々しく震えていた。

ハーヌはうなだれて詫びを繰り返す。

「すまない」

否定しないってことは——。

重い沈黙の中、波の音が響く。

「場所が違うということはありませんか？」

ユーノが希望を探そうとするように訊いたが、ハーヌは首を横に振った。

「いや、確かにここだった」

再び波の音が響く。

「宝玉がもう一度鴉に持ち去られたのなら、それを探せばキーネさまは戻れるのですよね？」

ユーノがまた別の切り口を探し出して尋ねたが、ハーヌはこれも否定した。

「持ち去られたんじゃない、なくなったんだ。別の場所に移動したのなら、俺にはその場所が分かるはずなのに、この近くには異界に繋がる気配が全くない。消えたと言いたいようがないんだ」

ユーノが気圧されたように黙ると、三度沈黙が落ちた。繰り返す波の音。

ふと見ると、海から月が上るところだった。夕日が落ちたと同時に登るのが満月なのは、あちらの世界と同じらしい。ここは山影だから完全な日没ではないはずだが、それでも円に近い大きな月に向かって海面が道のように銀色に輝く。

神秘的な光景はどこか現実感がなく、このまま気がつけばいつもの自分の部屋で転寝をしていた自分に気づくのではないかと、そんなことをふと思う。そう、夢だと思った方がずっと自然だ。

「あ」

ぼんやりと逃避していた私の隣で、ユーノが突然低く叫んだ。そのまま海岸に急ぎ足で向かう。濡れたように光る浜辺の一部を指して、ユーノが私たちを呼んだ。

「これを見てください」

覗き込むと、それは足跡だった。波に消されて辿ることはできないが、明らかに人間の足跡だと思える凹みが断続的に見えている。

「誰か来て、宝玉を持ち去ったのではないでしょうか」

「この島には人が住んでいるの？」

「いいえ。無人島ですが、私と一緒に来た者たちがいます。私がかなか戻らないので探しに来て、偶然石を見つけたかも知れません」

「それで持ち去った？」

「ええ。見つければ拾うでしょうし……、あ」

何かを思いついたようにユーノがハーヌを振り仰いだ。

「私たちは石を見つけたら直ちに入れるようにと言われて、中に鏡を張った箱を持たされていました。それが入口が消えたことに何か関係しているのではないのでしょうか」

「鏡張りの箱か。あり得なくはないな」

ハーヌが考えながらも頷くと、ユーノが強く提案した。

「私の船に行きましょう。この島の反対側の入江に停泊しているはずです」

「よし、行ってみるか」

ハーヌの言葉に私も賛成した。こうしていても仕方がない、というよりも、何か目的がないと精神的に壊れてしまいそうな気がした。すぐにハーヌの背に乗り、夜の色に染まった空に飛び立つ。四度目の飛行はもう慣れたものだった。冷たい夜の空気の中をハーヌは軽々と島の真ん中の小高い山を飛び越える。

ほんの一飛びで見えた入江では、本日何度目かの衝撃が待っていた。

「いない、私の船が――」

ユーノが叫んだ。そう、夕陽に照らされた入江に船はいなかったのだ。

ハーヌが辺りを確認するように旋回したが、船は影も形もなかった。

「降りてみよう」

言いながら入江の脇の砂浜にハーヌが降りる。見れば海岸から少し離れた小高い場所には天幕が張られ、焚火の用意もされている。この付近に人がいたことは間違いない。

更に近寄って見ると、天幕も焚火もあと少しで完璧という段になって突然放り出された様子が窺えた。天幕の入口に置き去りにされた寝具、焚火を始めるべく積まれた薪の脇に落ちている一束の柴。転がった樽。

薪の脇に一枚の紙が置かれていた。書かれているのは私には読めない文字。

ユーノが拾い上げて、険しい顔で目を走らせる。

「何て書いてあるの？」

「明日の朝、迎えを超越すそうです。この島に危険な獣はいないが、鴉には十分気をつけるように、と書いてあります」

言いながらユーノは紙を握りしめた。

何か言わないといけない気がして、私は思い出したことを言った。

「そういえば、さつきハーヌの上から帆船が見えたわ」

「どんな船でした？」

私が特徴を言うと、ユーノはがっくりと肩を落とした。

「それが私の乗ってきた帆船です」

「それなら俺も見だな。あの時にわかっていればすぐに追ったのだが」

「私はマントから外が見えませんでしたので……」

溜息と共にユーノが呟いた。

「これから追うのは無理だな。夜だから探しようがない」

ハーヌの言葉に私は密かにほっとした。先程飛んだときに分かったのだが、この時刻で既に上空はかなり寒いのだ。これから夜にかけて長時間飛ぶのはかなり辛いだろう。

「そうですね。行先はわかっていますので、明日、一緒に行ってくださいますか？」

ユーノの言葉に私はびっくりして尋ねた。

「わかっているの？」

「ええ。きつとドウエラの港です」

ユーノはきつぱりと断言した。

入江・2

沈んでいく夕陽に照らされながらユーノと確認すると、放棄された野営地には食料も水もたつぷりと用意されていた。天幕は一つだけだったけれど毛布は何枚も積まれていたし、焚火用の薪は火を点けるばかりの状態に組まれていて、ご丁寧にデイクターズチェアのような持ち運び用の椅子がいくつか置かれている。キャンプとしては随分恵まれていると言えるだろう。さすが王族さま御一行のことだろうか。

天幕の中にあつた日用品の入った箱にブラシがあつたので、私は自分とユーノの服を丁寧に払った。もちろん手と拾って来た宝石は海水でよく洗い流した上で、箱の中の石鹸で洗って樽に入っていた真水で濯いだ。

「この宝石、どうすればいい？」

ユーノに指示を仰ぐと、あっさりした答えが返ってきた。

「キーネさまがお持ちください。キーネさまが拾ったものですから」「私、宝石なんか持つても仕方ないけど」

こんなもの、あちらに持って帰っても豪華すぎて身につけることも換金することもできない。

「それでもキーネさまのものですから。国に帰ったらきちんとした値で引き取らせていただきます」

そう言われてもとは思ったけれど、ユーノは忙しそうだし、ハリー又は鞆なんか持っていないから、結局私が持つていることにした。リュックから化粧ポーチを取り出して、中を入れ替える。化粧品はあまり使わないことにしているから大して量はないので、鞆の底に直接入れておくことにした。

私がそんなことをしている傍らで、ユーノは手際よく辺りを整え、薪に火をつけた。火打ち石で火を熾し、焚きつけから本格的な薪に炎を広げていく作業はなかなか難しそうなのに、ユーノは戸惑った

様子もなく着々と進めていく。王子さまでも私より余程生活力があるようだ。ライターどころかマッチもない状況では私には火は熾せない。

ハーヌはというと、焚火のあちら側にある色々なものをかなり強引な方法で撤去していた。程なくハーヌの巨体が寛げるだけの空間が現れる。少し離れれば開けた場所はいくらかもあるのだが、私たちの傍にいてもりらしい。それが義務感からなのか、あるいは社交的な性格からなのかは不明だ。

ちなみに火をつけようとしているユーノに、ハーヌに頼んだら、と提案したら、ユーノが何か言う前にハーヌに断られた。曰く「一瞬で灰にするならできるが」だそう。聞いた私が莫迦だった。

ユーノはそんな大技には頼らなくても全く困らないようで、いよいよ日が沈んで手元が暗くなる頃には空に向かって明々と火が燃え上がった。ハーヌと私もちようどよくそれぞれの用事を済ませて火の周囲に集まる。周囲を闇に包まれた中で見る炎は安心感に満ちて、私は改めて火を熾してくれたユーノに感謝した。

炎が安定すると、次にユーノは薪の山は挟むように立てられていたY字型の金属の棒にやはり金属の棒を渡しそこから水を入れた鍋を下げた。今度は食事の支度らしい。本当に何でもできる王子様だ。一旦手を止めたユーノは困ったようにハーヌに尋ねた。

「ハーヌさまの食事はどうしましょう？ 材料はたくさんあるのですが……」

確かに、竜って何を食べるんだろう？ 何であれ尋常な量ではないだろうなと思う間もなく、ハーヌは簡単に答えた。

「俺には構わなくていい」

「ハーヌは食べなくていいの？」

「まったく食べないわけじゃないが、今は必要ないな」

「わかりました。それでは私たちの分だけ用意いたします」

言ったものの、ユーノは立ち上がると脇に置かれていた樽を一つ抱えてハーヌの横にどさりと置いた。

「ワインは飲めますよね？」

「ああ、もらおう」

答えてハー又は樽の蓋になっている木に爪を掛け、ぱきりと割った。

「キーネさまも飲めますか？」

どうしよう。お酒はあまり好きじゃない。あまり強いこともあるし、それ以上にお酒の席にあまりいい思い出がないからだけでも食べるものがとんでもなく強烈な味だった場合、飲むものがあったほうがまだ何とかなるかもしれない。

迷った私が答える前にユーノはさつさと別の樽から二つのカップにワインを注いで、片方を私の横にあるテーブル代わりの木箱に置いた。

「よろしければどうぞ。お嫌でしたらそのまま置いておいてください」

——まったく、一々配慮がいいなあ。

ユーノは自分のカップから一口飲んで、今度はナイフと野菜を手にとった。手早く切って鍋に放り込む。どうやらスープを作るらしい。

「ユーノは王子さまって言ってたよね」

「ええ。現国王の第一王子です」

「王子さまなら、料理なんてする必要がないんじゃないの？」

先程からの疑問をぶつけてみる。

「ええ。王宮ではまずしませんね」

ユーノはあっさりと頷いた。よかった。これで毎日していると言われたら王宮のイメージが崩れるところだった。

「それにしても手際がいいよね」

「ありがとうございます」

律儀にお礼を言って、ユーノは理由を続けた。

「私は士官学校にいましたので、野営に伴う雑用は一通り訓練を受けました。あくまでも訓練だけだったのであまり上手ではありません

せんが、最低限のことはできます」

「王子さまが学校に？」

「ええ。貴族の子弟の多くが士官学校に通うのが慣例ですから。軍の掌握と共に同世代の貴族に知己を得るのは将来の治世に必要なことです」

なるほど、将来国を治めるとすれば、王宮でのほほんとしているばかりではいけないのだろう。

「雑用もするなんて、王子さまでも特別扱いされないんだね」

「特別扱いされると、仲間になれませんから」

ユーノはさらりと答えて鍋をかき混ぜた。最低限しかできないと言いつつ、危なげのない動き。元々器用なのかもしれない。

鍋に蓋をすると、ユーノは次に金属の横棒に網を水平にぶら下げて、茶色いたれに漬けこまれていた肉を乗せた。入江から聞こえる波の音に薪のはぜる音と鍋の煮えるぐつぐつという音が乗り、更に肉の焼けるじゅうつという音が加わった。いつもより音がよく聞こえる気がするのは、他の音がしない所為だろうか。

夜空の下で、目の前には揺れる炎。隣には金髪美形の王子さま、向かい側には巨大な竜。どうしても現実とは思えないのに、何度手をつねっても目が覚めない不思議。

ぼんやりしている私の横で、ユーノは手を休めることなく手早く使った道具を片づけ、物入れから木の器と金属スプーンを取り出して木箱の上に置いた。鍋を覗いて調味料らしきものを少し入れ、改めてかき混ぜる。ふわりと美味しそうな匂いが漂った。

軽く味見をしてから、ユーノは素朴な木の器にスープを注いで渡してくれた。

「熱いですから気をつけてください」

「ありがとう」

礼を言って受け取り、そっとスプーンでかき混ぜる。暖かい湯気が鼻腔をくすぐった。まずはスープだけをそっと掬う。色と匂いの感じからすると特別辛かったり酸っぱかったりといったことはなさ

そうだ。

恐る恐る口に含むと、予想通り比較的穏やかな塩味のスープだった。先程ユーノが入っていた中によく分からない素材があったのだが、どうやら干した魚肉だったようで、微かに出汁のような味がする。次の一口は具も一緒に。ほろりとした歯触りと共に優しい味が口の中に広がった。

「美味しい」

素直な感想を言うと、ユーノがにこりと笑った。

「お口に合ってよかったです」

食べ始めると、お腹が空いていたことが改めて感じられた。そう言えばお昼から今までカフェオレ一杯しか口にしていない。身体は結構動かしたのに。

思わず黙ってスープに集中していたら、視線を感じた。目を上げるとハー又がこちらを見ている。何だろう。

——さっきは食べなくていいって言ってたけれど、他人が食べているのを見たら食べたくなることってあると思う。ハー又もそうなのかな。

そこまで考えて、唐突に昼間の会話を思い出した。

——女の子ってのはおやつにちょうどいい——。

「も、もしかして、私のこと、食べようとかって思ってる？」

浮かんだままに口にしたら、ハー又が怪訝そうに首を傾げた。

「は？」

「だって、昼間、女の子はおやつにちょうどいいって……」

言いながら自分でも莫迦なことを言っていると思って声が小さくなる。だって、もしもハー又が私を食べる気なら、とっくにそうしていただろう。今更訊くようなことではない。

案の定、ハー又は私の言葉を理解すると、身体を揺すってげらげらと笑いだした。

「冗談だ、冗談。キーネを食べたりなんかしないから安心しろ」
身体が大きいだけに笑い声も大きい。

ひとしきり笑ったハー又は、ふと意味不明なことを言った。

「いや、別の意味では食いたいかもな」

「え？」

「いや、ま、気にするな」

ハー又に説明する気はないらしい。

黙って遣り取りを聞いていたユーノが、楕円形のパンに切れ目を入れながら尋ねた。

「キーネさまは、ハー又さまといつから一緒にいらっしゃるのですか？」

「ユーノに会う、少し前から」

端的に答えると、ユーノは納得したように頷いた。

「ああ、そうなんですね。息が合っていていらしたので、もっと前から一緒だったのかと思っていました」

ユーノはパンを網の端に乗せて肉をひっくり返した。肉の焼ける音と共に香ばしい匂いが漂った。あれ、この匂いは……。

入江・3

「キーネさまの世界には、竜はいないのですか？」

追加の薪をくべながらユーノが尋ねる。

「うん。伝説はあるけど会った人はいないし、私もハーヌに会うまでは架空の存在だと思ってた」

正直、今日の前にしていてさえ、これが現実だとはあまり信じられない。そんな私とは対照的に、ユーノはもっと普通にハーヌに接しているようだ。

私はユーノに同じ質問を返した。

「ユーノはハーヌよりも私に驚いていたけれど、こちらには竜はよくいるものなの？」

「よく、というわけではありません。私も竜に会うのは初めてですから。でも私が知らなくても、この世界には確かに常に竜が存在しているのだと思っています。——そうですね？」

ユーノに問いかけられてハーヌが頷いた。

「ああ、そうだ。群れになっているわけじゃないから俺も全体でどのくらいいるのかは知らないが、いることはいるはずだ」

——群れにならないってことは、家族はいないんだろうか。

今日会ったばかりでこれを尋ねるのは不躰だろうかと思巡する私に、ユーノは本筋の続きを語る。

「マレビトさまは、その呼び名のとおり、非常に稀な方で、我が国の歴史上で知られているのは三人だけです」

やっぱりマレビトは「稀人」らしい。歴史上三人というのは、確かに珍しい。

網からパンを取り上げ、サラダ菜っぽい葉っぱと焼けた肉を挟みながら、ユーノは言葉を続けた。

「一人目の稀人は、建国の稀人と呼ばれています。その名の通り、我が国を作った方です。四百年程前にどこからともなく現れ、こち

らの世界で得た親友と共に現在の地にアンティデュールの国を築きました。建国の稀人スズーキは、荒地同然だったアンティデュールをその不思議な力で開拓し、実り豊かな住みやすい土地に変えたと言われています」

ユーノはスズーキと真ん中にアクセントを置いて呼んだけれど、きつとその人の名前は鈴木さんだったんだろ。どうやら日本から異世界に渡った人が稀人だと思っただけだよ。とはいえ、四百年も前の人にそんな不思議な力があつたのだろうか。そもそも今だつてそんなことが一人の力でできるとは思えないし。

「スズーキと共に国を開いた親友が現在の王家の祖、つまりは私の祖先です」

一旦話を打ち切り、ユーノは肉と野菜を挟んだパンを木の皿に乗せて私に差し出した。

「どうぞ。お口に合うといいのですが」

「ありがとう」

受け取った皿を木箱に置いてパンを持ち上げると、予想したよりずっしりと重みがあつた。とはいえ、気になるのはこの匂いだ。まずは顔に近づけてゆっくり匂いを嗅いでから、私はパンからはみ出していた肉の端を小さく齧り取った。舌に広がる馴染んだ味。匂いから予想はしていたものの、それでもやっぱり信じられない。

「照焼き？ 醤油があるの？」

もう一口食べてみたけれど、やっぱりこれは甘辛い醤油の味だ。こんな西洋風ファンタジーっぽい世界で初めて食べる食事が醤油味ってどういうことなんだろう。

「ああ、やっぱりキーネさまはご存知でしたか」

ユーノが納得したように頷いた。

「醤油は二人目の稀人、食の稀人と呼ばれるトーゴがもたらしたものです」

トーゴ——東郷さんだろうか、それとも名前のほうで東吾さんかな。

「今でこそ我が国では一般的な味付けですが、他国では名前こそ知られているもののほとんど生産されていないので、アンティデュールの名産の一つになっています」

醤油を知っていて、こちらにあることに驚く私は間違いなく稀人だとユーノは言いたいらしい。確かに私は日本から来たから、その意味では稀人ということなんだろう。

私は改めて手の中の照焼きサンドを口に運んだ。しっかりと歯応えのあるパンに挟まれた照焼き味のステーキ。違和感のない馴染み具合が、醤油味がこの国の文化に溶け込んでいることを物語っている。

「もしかして、味噌もある？」

思いついて尋ねてみると、自分の分の照焼きサンドを食べていたユーノが大きく頷いた。

「はい、あります。やはり味噌もご存知なんですね」

「うん。どっちも大豆を発酵させて作るものだから、片方あるならもう一つもあるかなって思ってた」

——大豆を発酵させて、と言葉で言うのは簡単だが、それを異世界で実現するのはどれだけ大変なことなんだろう。酵母菌は最初からあったのかな。

「トーゴはあちらの世界では大きな店を持つ料理人だったそうです。醤油や味噌といった食材や味付け、調理法を伝えるとともに、調理をする際の衛生管理の方法や健康を維持・増進する為に必要な栄養についての知識も広めました。トーゴの時代以降、我が国の国民の体格は飛躍的に向上し、平均寿命は格段に長くなりました」

ユーノの言葉の端々から、稀人に対する心からの尊敬の念が窺える。

確か二人はそれだけの業績を上げたんだから当然かも知れないけれど、同じものを私に期待されていると思うとひどく居心地が悪い。「三人目の稀人はどんな人だったの？」

この様子だときつと三人目も偉人なんだろうと予想しつつ、一応

訊いてみる。

「三人目は、慈愛の稀人、アイコです」

——アイコなら、愛子さんかな？

「女の人？」

確認するとユーノが頷いた。やっぱり同郷なんですねと言いたげな表情。

「はい、そうです。アイコは今から八十年ほど前に突然王宮に現れました。妙齡のとても美しい女性だったそうです。私は肖像画で見えたことはありませんが、黒髪に黒い瞳の小柄な方で、その肌のきめ細かさは年齢を重ねても衰えることがなかったと言われていました」

いきなり前の二人よりも説明がリアルになったのは、時代が近い所為だろう。八十年前なら、ユーノの身近にアイコさんに会ったことのある人がいるのかもしれない。

「当時独身だった王太子を始め、有力な貴族たちが揃ってアイコに求婚し、その心を射止めようと右往左往しましたが、結局アイコは貴族の中でも比較的身分の低い一人の男と結婚しました」

つまり、王子さまはフラれたのか。なんだかロマンチックな小説みたいだ。鈴木さんや東吾さんより下世話な気がするのは恋愛絡みだからだろうか。

「いろんな人に求婚されたから『慈愛の稀人』なの？」

それはそれで一つのお話にはなるけれど、ちょっと鈴木さんたちより格が落ちる気がする。いや、その方が私としては助かるんだだけだ。

「いいえ、確かにアイコは美貌の人でしたが、彼女の素晴らしさはその容姿だけではありません。彼女は王や貴族たちに進言して、学校や福祉施設を整えさせました。親のない子にも教育を受けさせ職業訓練を徹底した結果、我が国の生活水準は向上し、また貧困層が激減したことで治安が向上しました。現在我が国は他国に比べ治安のよい国として知られており、トーゴのもたらした食文化と共に観

光収入に繋がっています」

「うわあ、社会改革か。王宮でちやほやされていただけじゃないのね。慈愛の稀人と呼ばれるだけのことはありそうだ。」

「また、彼女の夫は後に名宰相と呼ばれるようになったのですが、二人の間には子どもが授からなかったので、アイコは孤児の中から養子を迎えました。彼は義父の後を継ぎ、その実力で自らも宰相となり、我が国の発展に多大な貢献をしました。アイコが育てた子どもたちは他にも大勢いて、皆それぞれに我が国の重要な地位を担いました」

「ああ、もう、偉すぎて声も出ない。」

「はふうと溜息をついてパンを齧ると、ハーヌがこちらを見て笑った気がした。」

「何？」

「いや、期待されるのも大変だなと思ったただけだ」

「あ、わかってくれる？」

「だが、キーネが期待に応える必要はないんじゃないのか？ 察するにその稀人たちは帰りたくても帰れなかったんだらう？」

「私への同意の代わりに、ハーヌはユーノに質問を投げた。」

「そうですね。スズーキに関しては、当時我が国はとても貧しく、紙も非常に貴重だったために細かな情報が残っていないのでわかりません。一方トーゴは弟子も多く記録も豊富です。トーゴは元の世界に妻子がいたのに突然こちらに飛ばされてしまったため、ずっとあちらのことを気に掛けていたそうです。つまりは帰りたくても帰れなかったんですね。アイコについても帰る方法を模索する中で後に夫君となる男性と親しくなったそうですから、最初は帰りたいのに帰れないという状態だったはずです。結婚後はすっかりこちらに根を降ろした暮らしぶりだったそうですが、それでも時折あちらを懐かしんでいたと聞いています」

ユーノは考えながら答えると、ハーヌが予想通りといった様子で説明した。

「やっぱりな。入口が宝玉なのは分かったとしても、人間には道を開くことはできないはずだ。それこそ何かのはずみで落ちるのでなければ、通ることはできないものだ」

帰りたくても帰れなかった人たち。さっきまで偉いとは思わなかった稀人たちが、急に同情すべき人たちに思えてきた。

「キーネは入り口さえ見つかれば俺が通す。偉人なんかにならなくていい」

——あ、元気づけてくれているんだ。

ハーヌの言葉にほっと肩の力が抜けた。

「とりあえず宝玉さえ取り返せば問題は解決だ。キーネはあちらに帰れるし、ユーノは儀式が行える。そうだろう？」

「はい、そうです。——それ以上をキーネさまに求めるのは筋違いだと仰るのですね」

ユーノが頷き、確認するように尋ねた。

「ああ、そうだ。そこまでなら俺も協力しよう」

「わかりました。よろしく願います」

ユーノがハーヌに頭を下げるのを見ていて、少し申し訳なくなつた。私が期待に応えられるかは別として、ユーノにとっては宝玉の在りかが分かつててもそれで終わりになるほど簡単な事態ではないだろう。何しろ相手はユーノに渡す気がないから勝手に持ち去つたのだろうし、王子さまを置き去りにするっていうのはどう考えても重罪だろう。それでも踏み切つたのだから、相手は相当の覚悟をしているはずだ。

「あの、行く先がわかっているってことは、宝玉を持って行つた犯人もわかっているってということ？」

「ええ。我が国の宰相です」

ユーノははつきりと言いつつた。

「宰相？」

それって、王様の次に偉い人のことだよな？

「そうです。国宝が失われたことは公にできません。私の配下の者を動かすと目立つので、今回は私が宰相領であるドウエラを訪れ、領内を宰相が案内するという体裁にしました。ですから船も兵もすべて宰相の物、彼らを動かせるのは同行していた宰相だけです」

そうか。たとえ宝玉を見つけたのが下っ端の人だったとしても、最終的に宰相が指示しないと船は出せないもんね。

「置き手紙も宰相の署名で、本人の筆跡でした。間違いありません」
「そういえば手紙もあつたんだっけ。すっかり忘れてた。」

「なんで宰相が持ち逃げするんだ？ 一緒に探しに来たなら、お前に差し出せば済むだけの話だし、逆に国王を倒して自分が玉座に座ろうって魂胆なら、明日迎えに来るなんてまだるっこしいことを言わないでさっさとお前を殺してしまうはずだろう」

ハーヌが言うことは物騒だけど、確かにそうだと思う。それだけ大切なものを持ち逃げしておいて、迎えに来るってのは中途半端じゃないだろうか。

「宰相にとっては私が王位を継がなければそれでいいのでしょうか。」

私が宝玉を手にすることができなかった事実を公にして、弟を王太子に据えようとしているのだと思います」

王子が複数いて、長男派と次男派で争っているっていうことかな。物語の中だとよくある話だし。

そう思つて尋ねたけれど、ユーノは首を横に降った。

「弟と私は母も同じですし、何よりも弟はまだ5歳です。妹は三人おりますが男子は長年私だけでしたから、今更無理に弟を担ぎ出すという者はほとんどおりません。勿論絶対にはないわけではありませんし、多分宰相も私の代わりに弟に王位継承権を与えるつもりでしょうが、それが本当の目的ではないと思います。そもそも宰相は我が国内で盤石の地位を築いておりますから、王位に就くのが私であつても弟であつても、彼自身には影響はないはずです」

淡々とユーノは語る。それほど宰相に怒りを感じている風でもないので不思議だ。裏切られたと腹が立ったりしないのだろうか。

「だったらどうして」

「私には婚約者がおりません」

いきなり話が飛んだ。

「？」

「北の大国マグナルンドから、私の成人と共にあちらの王女と婚約する話が持ち込まれているのです。マグナルンドはアンティデュールよりもずっと大きな国ですから、いずれ吸収しようという魂胆に間違いありません。わが国はこれまでは他国との婚姻は極力控えて独自の国造りをしてきました。何分小さな国ですから一度マグナルンドの血を入れてしまえばいずれ何か理由をつけて継承権を要求され、やがて吸収されてしまうと確信しているからこそその選択です。また、マグナルンドと婚姻関係を結ぶことでもう一つの大国タスネグナから敵対視されるのも避けたいところです」

「なるほど、アンティデュールとしては二大国のどっちにもつきたくないわけだ」

ユーノが言葉を切ったところでハーヌが確認するように尋ねた。

「はい、そうです。これまで二国と等距離外交を貫いてきただけに、宰相もこの婚姻は全力で回避しようと手を尽くしてきました。逆にいえば、それでも回避できなかったほど、マグナルンドは何があってもこの婚姻を成立させたいと望んでいるということです」

継承権だの外交だのって、お話の中のような言葉だ。いや、それ以上に目の前に焚火、その向こうに竜、隣には王子さまってのが既にお話の中って気分なのだけだ。つい今しがた食べ終わったばかりのテリヤキサンドの味をちょっと出汁風味のスープで打ち消したら、ほら、もう完全にお話の世界。

私の感慨を余所に、ユーノは説明を続ける。

「アンティデュールは小さいとはいえ独特な高い文化を持っているので、国際情勢的には重要な位置にあります。ここで我が国がマグナルンドと結ぶと、周辺諸国がこぞってマグナルンド側について二国間の均衡が破れ世界を二分するような大きな戦争に繋がる可能性があることも、この婚姻を阻止したい理由の一つになっています」

「大国の王女さまと結婚するとマズいってのはわかったけど、それがどうして宝玉泥棒に繋がるの？」

ユーノの説明は分かり易いのだけど、どうも全体像がわからない。

「私が王位を継がなければ、私と結婚してもマグナルンドに利益がありませんから」

「だったら弟さんと結婚するとか言い出さない？ 歳が離れているといっても、他にも王女はいるからとか言って」

もうすっかり私の中はお話しモードだ。政略結婚なんてものに現実感はあるでない。

「私が幼い時からこの婚約話はあったのですが、父が私が成人するまではと言ってはつきりと答えないままにしていたのです。ですから、弟に継承権が移れば弟が成人するまでは猶予ができます。時間稼ぎと言われればそのとおりですが、それまでにはまた各国の情勢も変わるでしょう」

「なるほどね」

だからこそ、宰相はユーノを殺す必要がないし、逆に殺してしまえば大問題だけれど、明日の朝迎えに来るのであればまだ言い訳の余地はあるってことなんだろう、きつと。

「別の人と結婚しちゃうってのは？」

お話モードのまま更に訊いてみると、ユーノが苦笑した。

「そういう相手がいればいいのですが。私の両親も恋愛結婚でしたし、我が国は比較的大らかで自由な気風なので、私が強硬に主張すればそれは可能なことです。だからこそ成人までは相手を決めないなどと言い張ることができたのですから」

「相手、いないの？ 王子さまならすぐモテそうなのに」

ユーノなら王子さまじゃなくてもモテるだろうけど、と心の中で付け足す。

「残念ながら」

ユーノは肩を竦めて自嘲気味に笑った。

「頼めば結婚してくれる女性はいるでしょうが、王太子の結婚相手は心身ともに重労働ですから。気軽に頼めるものではありません」

ここでその回答が出る辺り、ユーノは恋愛自体を諦めている気がする。王子さまの立場だと確かに恋愛が難しいのはわかるけど、その老成した態度はなんだか物足りないぞ。

入江・5

話ながらスープも飲み終わるとお腹は満たされたものの少々口寂しくなつて、私は木箱に置かれたままになつていたカップに手を伸ばした。使いこまれた金属のカップの中には暗い中でも赤黒く見える液体。赤ワインらしい。

慎重に匂いを嗅いで、少しだけ口に含む。お酒の味はよくわからないけれど、癖がなくて飲みやすいと感じた。

「酒、飲めるのか？」

ハー又が心配そうに訊く。

「うん。あんまり強くないけど、少しなら」

「無理しなくていいんだぞ」

ハー又は保護者気質なのかもしれない。

「無理じゃないよ。考えてみたらこちらの世界のお酒を飲む機会なんてもないかもしれないんだから、味わっておこうと思って」

「ああ、それはそうだな」

ハー又が納得したところで、もう一口。

「あちらのものとは違いますか？」

ユーノに尋ねられたけれど、残念ながらその質問にきちんと答えるための知識が私には欠けている。

「ごめん、私、あちらではあんまりお酒に馴染んでなかったから、比べられないの。でも、さっぱりしてて飲みやすいワインだと思う。これって葡萄から作ったお酒だね？」

「そう、葡萄の酒です。夜に行動する予定だったので、酒としては弱め物ですが、口当たりがいいので、慣れていらっしやらないのなら飲みすぎないように気をつけてください」

保護者気質はもう一人いたらしい。

「うん、ありがとう。そこまで考えて持ってくるお酒の種類も決めるんだね」

ユーノたちは夜に渡り鴉の島に行く予定だったと言っていたわけ。
「ええ。冬の行軍ですと、身体を温めるためにもっと強い酒を少し
ずつ飲むようにするんですよ」

「行軍って、他所の国と戦争したりするの？」

ユーノの何気ない言葉にちよつと引つかかって訊いてみる。

「いえ、我が国は立地に恵まれているので対外戦争はほとんどした
ことがありません。軍の役目は主に国内の犯罪の取り締まりです。
以前は王都から離れた場所の平定をしていた時期もありましたが、
国内が統一されて以降、行軍は示威の面が強いですね」

よかった、平和なんだ。たとえ平和ボケと言われても、戦争は無
いほうがいい。

「立地って、海に囲まれていて他国と接していないとか？」

イメージがわからなかったので、とりあえず日本地図を思い浮かべ
てみた。

「正確に言えば、アンティデュールはハルドニア大陸の一部です。
ただ、南と東は海に面していて、東は大河サザールが隣国との間に
流れているので、国境線を巡って争うことがほとんどないのです。
その意味では海に囲まれているのに近いかもしれません。唯一、北
側が大国マグナルンドと接していますが、こちらも巨大な山脈に隔
てられていて、細々とした交易路はいくつもあるものの、国境紛争
にまで発展することはまずありません」

「マグナルンドって、王女さまがユーノと結婚したがつている国だ
ったよね？」

うる覚えの記憶で尋ねると、ユーノはよくできました、というよ
うに頷いた。

「はい、そうです。アンティデュールとの繋がりを強くして街道を
整備し、軍隊の行き来が容易にできるようにした上で、支配下に入
れるつもりでしょう」

「アンティデュールが海に面しているなら、隣の国も海沿いじゃな
いの？ わざわざ山を越える道なんか作らなくても海から来ればい

いのに」

——東が海で、北がマグナルンドなら、マグナルンドの東側も海だよ。って、単純に考えたら駄目かな。

「はい、そうなんです、あちらの海岸は地形が入り組んでいて大きな港が作りにくい上に、潮の流れがきついところが多くて航海には不利なんです」

あやふやな感じで尋ねたけれど、それはそれで間違いではなかったらしい。

「近年西の大国タスネグナが貿易で発展してきたこともあって、マグナルンドとしては海路の充実した我が国の港が魅力的に思えるのだと思います」

「なるほどねえ。ユーノの国は貿易も盛なんだ」

私の感想にユーノは僅かに胸を張った。本人が王子さまで、まさに自分の国のことだもの、誇らしいのだろう。

「はい。アンティデュールは初代の国王と稀人スズーキの意志もあり、建国の時から領土の拡大よりも国民の生活の向上を目指した国造りをしてきました。結果的に最近隣国であるマグナルンドよりも、海路で交易のあるタスネグナとの結びつきが強まっていることも、マグナルンドの焦りを誘っているのだと思います」

こんな国家間の問題を軽々しく話していいのかと心配になってきたけれど、この程度の話、こちらでは常識なのだろうか。それとも「稀人」にまだ期待しているのかな――。

「それだけいろんな国と交流があるのに、こちらの人はみんなユーノみたいな金髪なの？ 黒髪の人の国ってないのかな？」

「金髪とは限りませんが、茶色か、せいぜい焦げ茶までですね。キーネさまのように真っ黒な髪の方は、私は見たことがありませんし、そういった人の国があると聞いたこともありません」

「そっかあ」

次の台詞を言おうかどうか、ちょっと迷ったけれど、結局私は言うことにした。期待されたままなのは落ち着かないもの。

「あの、さ」

言葉を探すのを誤魔化すようにもう一口ワインを飲んでから、唇を舐めて、それから改めて告げる。

「私の髪、本当は黒じゃないよ」

「え？」

怪訝そうにユーノが首を傾げた。

「ちよつと都合で今だけ黒く染めてるの。暗めの茶色が本来の色。多分こちらでは珍しくない色だと思う」

私のお祖母ちゃん——お母さんのお母さんはヨーロッパ生まれの人だった。若い頃にお祖母ちゃんのお父さん——私のひいお祖父ちゃんの仕事の関係で来日した際にお祖父ちゃんに出会って、そのまま日本に残ることにしたという。そう、私はクォーターだ。

もちろん遺伝子的には黒髪のほうが優性だし、四分の三は黄色人種なのだけれど、それでも私の髪は黒とは言い難い。お父さんの家系にも茶色っぽい髪の人が多いことが関係しているのかもしれない。「今までの稀人はたまたま黒髪だったということですか？」

ユーノが不思議そうに訊く。

「うん。名前を聞く限り今までの稀人さんたちはみんな日本人だろうし、日本人なら黒髪のほうが普通だから、偶然ってわけじゃない。私があちらでは異端だったってこと」

——そう、異端。自分で言葉にしていって改めて思う。考え方は個人主義のくせに日本の文化や風習が大好きだった「変な外人」のお祖母ちゃんに育てられた私は、日本では常に異端者だった。

「あちらの世界には茶色い髪の者もいた気がするが」

今度はハーヌが首を傾げた。

「ああ、あれはみんな染めているの。お洒落の一環ね」

「そうなのか」

「うん。だから、私に稀人の奇跡を期待しても無理だからね」

「私は別に髪の色が奇跡を起こすと思っっているわけでは……」

ユーノが困ったように言う。うん、ユーノはそこまで莫迦じゃない

いと思う。でも、私がずっとこちらに居たとしてもみんなに認められる稀人にすらなれないのは、今のうちに知っておいて欲しい。

「うん、わかってる。今までの稀人さんたちだって髪の色だけで評価されたはずじゃないってことくらい、私にもわかるから」

こくりと頷いてカップを見降ろしたら、なんだか酷く凹んだ気分になった。

こちらの世界で何か特別なことができるわけじゃないのは、最初からわかってた。でも、異世界に来て改めて現実の世界に馴染めない自分に気づくなんて、なんて莫迦なんだろう。

「どうした。酔ったのか？」

保護者その一のハーヌが優しく訊く。

「そうかもしれない」

そう、酔ったことにしておもう。きつと夜の焚火がいけないんだ。揺れる炎に照らされていると、必要もないのに感傷的な気分になる。

「きつとお疲れなんでしょう。天幕でお休みください。ここは私が片づけますから」

保護者その二のユーノが穏やかに言う。

「うん、ごめん。先に寝かせてもらう」

ゆつくりと立ち上がる。日が暮れてから食事をしただけだからまだ時間は早いはずなのに、本当に疲れているのか身体が重い。

天幕まで灯りを持ってついて来てくれたユーノは、てきぱきと一人分の寢床を用意し、その他こまごました気配りを見せると、そのまま出て行くとした。

「あ、ユーノの分も用意しておかないと」

きつとユーノは私が寝てしまったら隣でばたきするのは悪いと考えるだろうから、きちんとした準備ができないだろう。だったら今やってしまったほうがいい。

「私は外で寝ます」

「え。でも」

「焚火もありますし、若い女性と一緒に一夜を過ごす訳にはいきません」

私だっと一緒に寝たいわけじゃないけど、王子さまを天幕から追出すのは気が引ける。

「大丈夫です。この季節に天幕があるほうが珍しいんです。今回は鴉の視線から隠れる一環で用意しましたが、本来はなくてもいいものですから」

「そうなんだ」

それ以上押し問答する気力もなく、私はユーノの厚意を受け取ることにした。

「ありがとう。ごめんね」

「いいえ。ゆっくりお休みください」

「うん。おやすみなさい。ハーマも」

「ああ、おやすみ。よく寝ろよ」

焚火の向こうからこちらを見ていた竜が、ゆっくりと手を振るのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4460x/>

手のひらの竜

2011年12月25日17時46分発行